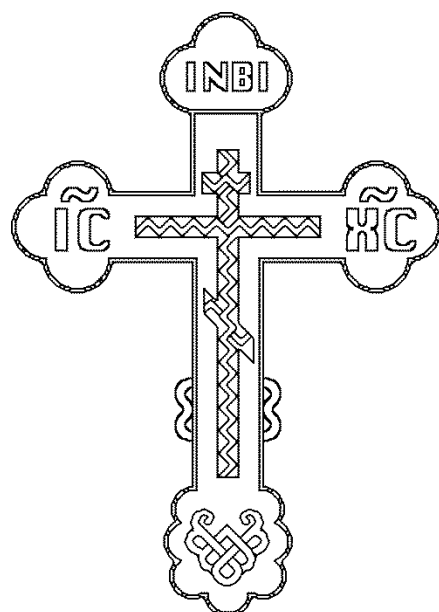




大齋日替わり

第2週 水曜日

2016

第2週間の水曜日

第 19 カフィズマ

第1段 第134、135聖詠

しゅ な ほ あ しゅ しよぼく しゅ いえ わ かみ いえ にわ た もの ほ あ しゅ
主の名を讃め揚げよ、主の諸僕、主の家、我が神の家の庭に立つ者よ、讃め揚げよ。主

ほ あ しゅ じんじ そのな うた こ たの けだししゅ おのれ ため
を讃め揚げよ、主は仁慈なればなり、其名に歌へ、是れ楽しければなり。蓋 主は己の爲

にイアコフを選び、イズライリを選びて其業となせり。我主の大なるを知り、我等の主

の諸神より最も高きを知れり。主は凡そ欲する所を天に地に海に悉くの淵に

行ふ、雲を地の極より起こし、電を雨の中に作り、風を其庫より出す。彼はエギ

ペトの初子を撃ちて、人より家畜に及べり。エギペトよ、彼は爾の中に於て休徴 奇

をファラオン及び其悉くの僕の上に遣せり。彼は多くの民を撃ち、有力の王を

滅せり、即アモレイの王シゴン、ワサンの王オグ、及びハナアンの諸國なり、彼等の

地を賜ひて業となし、其民イズライリの業となせり。主よ、爾の名は永く在り、主よ、

爾の記憶は世に在り。蓋 主は其民を審判し、其諸僕に憐を垂れん。異邦の

偶像は乃銀、乃金、人の手の造工なり。彼等口ありて言はず、目ありて見ず、耳あ

りて聴かず、其口に呼吸なし。之を造る者と凡そ之を恃む者とは是と相似ん。イズラ

イリの家よ、主を崇め讃めよ。アアロンの家よ、主を崇め讃めよ。レウィの家よ、主を崇

め讃めよ。主を畏るる者よ、主を崇め讃めよ。イエルサリムに在す主はシオンに崇め讃め

らる。「ア ril イヤ」。＜145 聖詠省略＞

誦経 光栄は父と子と聖神に帰す。

(詠) 今も何時も世に、「アミン」

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光栄は爾に帰す。(三次)

主憐めよ。(三次) 光栄は父と子と聖神^oに帰す。

誦経者の「光荣は」に続いて

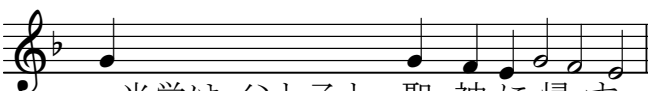


今も 何時も 世 世に アミン アリルイヤ、アリルイヤ アリルイヤ

3回



神よ光荣は なんじに 帰—す 主 憐れめ 主憐れめ主憐れめよ、



光荣は 父と子と 聖 神に 帰す

誦経者の「今も」に続く

誦経 今も何時も世々に、「アミン」。

第2段 第137-139 聖詠

われこころ つく なんじ さんえい しょうてんし まえ おい なんじ うた けだしわ くち ことば なんじ
我 心 を盡して 爾 を讃榮し、諸天使の前に於て 爾 に歌ふ、蓋 我が口の 言 は 爾

ことごと これ き われなんじ せいでん まえ こうはい なんじ あわれみ なんじ しんじつ ため
悉 く之を聴けり。我 爾 が聖殿の前に叩拜し、 爾 の 憐 と 爾 が眞實の爲に

なんじ な さんえい けだしなんじ なんじ ことば こうだい もろもろ なんじ な こ
爾 の名を讃榮す、蓋 爾 は 爾 の 言 を廣大にして、 諸 の 爾 の名に逾えしめたり。

わ よ ひ なんじわれ き わ たましい いさ しゅ ち しょうなんじ くち ことば
我が呼びし日、 爾 我に聴き、我が 靈 を勇ませたり。主よ、地の 諸王 爾 が口の 言

き と き みななんじ さんえい しゅ みち うた けだししゅ こうえい おおい しゅ たか
を聴かん時、皆 爾 を讃榮し、主の途を歌はん、蓋 主の 光荣 は 大 なり。主は高く

へりくだ もの み ほこ もの はるか し われも かんなん うち ゆ なんじわれ い
して、 謙 る者を見、誇る者を 遙 に識る。我若し 艱難 の中に行かば、 爾 我を生かし、

なんじ て の わ てき いかり おさ なんじ みぎ て われ すく しゅ われ かわ
爾 の手を伸べて我が 敵の 怒 を抑へん、 爾 が右の手は我を救はん。主は我に代りて

おこな しゅ なんじ あわれみ よよ なんじ て つく もの す なか
行 はん、主よ、 爾 の 憐 は世世にあり、 爾 の手の造りし者を棄つる母れ。

誦経 光荣は父と子と聖神に帰す。

誦経者の「光荣は」に続いて

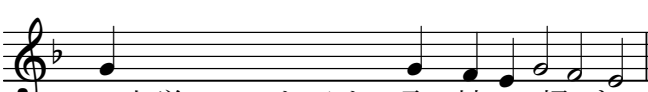


今も 何時も 世 世に アミン アリルイヤ、アリルイヤ アリルイヤ

3回



神よ光荣は なんじに 帰—す 主 憐れめ 主憐れめ主憐れめよ、



光荣は 父と子と 聖 神に 帰す

誦経者の「今も」に続く

誦経 今も何時も世々に、「アミン」。

第3段 (第140、141、142 聖詠)

しゅ わ いのり き なんじ しんじつ よ わ ねがい みみ かたぶ なんじ ぎ よ われ
主よ、我が 祈 を聆き、爾 の 眞實 に依りて我が 願 に耳を 傾 けよ、爾 の義に依りて我
き たま なんじ ぼく うったえ な なか けだしおよ いのち もの いつ なんじ まえ ぎ
に聴き 給え。爾 の僕と 訟 を爲す母れ、蓋 凡そ生命ある者は、一も 爾 の前に義と
せられざらん。 敵は我が 霊 を逐ひ、我が生命を地に 蹂 り、我を久しく死せし者の如
く 暗 に居らしむ、我が 霊 は我の衷に悶え、我が心は我の衷に曠しきが如し。我 古
ひ おも およ なんじ おこな かんが なんじ て わざ はか わ て の なんじ
の日を想ひ、凡そ 爾 の 行 ひしことを 考 へ、爾 が手の工作を計る。我が手を伸べて 爾
むか わ たましい かわ ち ごと なんじ した しゅ すみやか われ き たま わ たましい
に向ひ、我が 霊 は渴ける地の如く 爾 を慕ふ。主よ、速 に我に聴き 給へ、我が 霊
おとろ なんじ かんばせ われ かく なか しか われ はか い もの ごと われ
は衰 へたり、爾 の 顔 を我に隠す母れ、然らずば我は墓に入る者の如くならん。我
つと なんじ あわれみ き たま われなんじ たの しゅ われ ゆ みち しめ
に夙に 爾 の 憐 を聴かしめ 給へ、我 爾 を頼めばなり。主よ、我に行くべき 途を示し
たま わ たましい なんじ あ なんじ しゅ われ わ てき すく たま われなんじ はし
給へ、我が 霊 を 爾 に擧ぐればなり。主よ、我を我が敵より救ひ 給へ、我 爾 に趨り
つ われ なんじ むね おこな おし たま なんじ われ かみ ねが なんじ ぜん
附く。我に 爾 の旨を 行 ふを教へ 給へ、爾 は我の神なればなり、願はくは 爾 の善な
しん われ ぎ ち みちび しゅ なんじ な よ われ い たま なんじ ぎ よ
る神は我を義の地に 導 かん。主よ、 爾 の名に依りて我を生かし 給へ、 爾 の義に依り
わ たましい くなん ひ いだ たま なんじ あわれみ もつ わ てき ほろぼ およ わ
て我が 霊 を苦難より引き出し 給へ、 爾 の 憐 を以て我が敵を 滅 し、凡そ我が
たましい せ もの たいら たま われ なんじ ぼく
霊 を攻むる者を 夷 げ 給へ、我は 爾 の僕なればなり。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮 は父と子と 聖神 に歸す。今も何時も世に、「アミン」。

「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」、神よ、 光榮 は 爾 に歸す。三次

しゅあわれ
主 憐 めよ。三次

<続けて誦経>

斎1 【坐誦讃詞】 第三調。

われら かせつ せつせい とき おく ラッパ ふ うた うた よ い これ ふ せつせい
我等は嘉節なる節制の時を送りて、角を吹き歌を歌ひて、呼びて云はん、此は不節制の

よく か われら いのち よ さか もの な ことば なんじ じゅうじか ちから
慾を枯らして、我等の生命を世に榮ゆる者と爲せり。ハリストス言よ、爾の十字架の力
をもつ なんじ しよぼく こ うち まも たま
を以て 爾の諸僕を斯の中に護り給へ。二次。

十字架生神女讃詞、

こうおん なんじ あまん じゅうじか てい はじ し の たま
洪恩なるハリストスよ、爾は甘んじて十字架に釘せられて、恥づべき死を忍び給へり、
なんじ う もの これ み こころ さ むね う はは な せかい つみ にな しゅ
爾を生みし者は之を見て心刺され、膺を拊ちて母として泣けり。世界の罪を任ひし主よ、
かれ きとう よ なんじ だいじんじ もつ せかい あわれ すく たま
彼の祈禱に由りて、爾の大仁慈を以て、世界を憐みて救ひ給へ。

＜戻る。枠 P12、 50 聖詠＞

齋2 【三歌經の規程】

第三歌頌、 聖アンナの歌句、列王記第一卷二章一至十節

わ こころ しゅ よ よろこ わ つの わ かみ よ たか わ くち わ
右誦經句、我が心は主に縁りて喜び、我が角は我が神に縁りて高くなり、我が口は我
てき うえ ひら けだしわれ なんじ すくい ため たのし
が敵の上に開けたり、蓋我は爾の救の爲に樂む。

しゅ ごと せい もの けだしなんじ ほか た もの わ かみ ごと けんご
左誦經句、主の如く聖なる者あらず、蓋爾の外に他の者なし、我が神の如く堅固な
るもの
る者あらず。

おご ことば い なか きょうぼう なんじ くち い なか
右 句、驕れる言を言ふ勿れ、狂妄をして爾の口より出でしむる勿れ。

けだししゅ えいち かみ わざ かれ はか
左 句、蓋主は睿智の神にして、行爲は彼に權られたり。

かれ そのせいしゃ あし まも ふほう もの くらやみ うち き
右 句、彼は其聖者の足を守る、不法の者は幽暗の中に消ゆ。

しぜん かみ ことば なんじ だいじんじ よ じゅうじか て の むかし ちしき き の
至善なる神の言よ、爾は大仁慈に由りて十字架に手を舒べて、昔智識の樹に舒べたるア
て つみ のぞ たま
ダムの手の罪を除き給へり。

蓋人の力を持て堅固なるに非ず、主は之に敵する者を碎かん、主は聖なり。

くるしみ う しんじや くるしみ たま しゅ へび そねみ よ うご わ おもい かた
苦を受けて、信者に苦なきを賜ひし主よ、蛇の猜に由りて動かさるる我が思を堅めて、

なんじ　くるしみ　もつ　しょうく　こうげき　ふせ　たま
爾の苦を以て諸慾の攻撃を防ぎ給へ。

智者は其の智を以て誇る勿れ、強き者は其の力を以て誇る勿れ、富む者は其の富を以て誇る勿れ。

ものいみ　おんちよう　かがや　ふ　せつせい　やみ　ほら　いま　よ　い　ときおよ　すくい　ひ　われら　つうかい
齋の恩寵は輝きて、不節制の暗を拂ふ。今は嘉く納るべき時及び救の日なり、我等痛悔
の結果を顯さん、然らば活さん。

誇らんと欲する者は主を悟りて彼を知り、且つ地の中に審判と義とを行ふを以て誇るべし。

〔生神女讃詞〕　だらく　もの　あらため　いさぎよ　どうていじよ　われいつらく　ふけ　はなはだ　つみ　ふち　おちい
墮落する者の更新なる潔き童貞女よ、我逸樂に耽りて、甚しき罪の淵に陥り
し者を起して、生命に向はしめ給へ。

〔イルモス、3調「主よ、我が心を堅めて」〕

主は天に升起りて轟けり、彼は義にして地の極を審判せん。

しゅ　なんじ　じゅうじか　もつ　わ　こころ　かた　たま　われら　よこしま　ことば　けが　おこない　かたぶ
主よ、爾の十字架を以て我が心を堅め給へ、我等が邪なる言と汚らはしき行とに傾き
て爾より離るることなからん爲なり。

彼は力を以て其の王に賜ひ、其の膏つけられし者の角を高くせん。

しゅさい　てん　ち　なんじ　くるしみ　かん　あらわ　へん　なんじ　じつ　ばんゆう　おう　しめ
主宰よ、天と地とは爾の苦に感ぜられて、顯に變じて、爾が實に萬有の王たるを示せり。

光栄は父と子と聖神^ろに歸す。

〔聖三者讃詞〕　どうそん　むげん　しせい　さんしや　いのち　ほどこ　ひかり　げんいん　ゆいいち　しや　ちち　こ　せいしん
同尊にして無原なる至聖三者、生を施す、光の原因たる惟一者、父、子、聖神
よ、我を救ひ給へ。

今も何時も世々に、「アミン」

〔生神女讃詞〕　おっと　あずか　かみ　はは　なんじ　ひとりかみ　う　う　まえ　ごと　う　のち　どうてい　そこな
夫に與らざる神の母よ、爾は獨神を生み、生む前の如く生みて後にも童貞を損
はずして、貞潔の者と止まり給へり。

我等の神よ、光栄は爾に歸す、光栄は爾に歸す。

いイススよ、我等は爾の紫の袍、釘と十字架、海絨と戈に伏拜して、爾萬衆を活かし給
ひし主を讃め歌ふ。

イルモス3調「主よ、我が霊を堅めて、爾を歌頌せんことを教へ給へ、我等が爾救世主を世世に讃榮せん為

なり。」



【小連禱】

我等復又安和にして主に禱らん。

(詠) 主憐めよ

神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救ひ憐み護れよ。

(詠) 主憐めよ

至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん

(詠) 主爾に

司祭 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に (詠)「アミン」



第八歌頌、三少者の歌句、ダニイル三章五十七至八十八節

右誦經句 ^{しゅ}主の ^{ことごと}悉くの ^{ぞうぶつ}造物は ^{しゅ}主を ^{あが}崇め ^ほ讃めよ、^{かれ}彼を ^{うた}歌ひて ^{よよ}世世に ^ほ讃め ^あ揚げよ。

左誦經句 ^{しゅ}主の ^{しよてんし}諸天使、^{しゅ}主の ^{しよてん}諸天は ^{しゅ}主を ^{あが}崇め ^ほ讃めよ、^{かれ}彼を ^{うた}歌ひて ^{よよ}世世に ^ほ讃め ^あ揚げよ。

右 句 ^{しよてん}諸天の ^{うえ}上に在る ^あ水、^{しゅ}主の ^{ばんぐん}萬軍は ^{しゅ}主を ^{あが}崇め ^ほ讃めよ、^{かれ}彼を ^{うた}歌ひて ^{よよ}世世に ^ほ讃め ^あ揚げよ。

左 句 ^ひ日と ^{つき}月と、^{てん}天の ^{ほし}星は ^{しゅ}主を ^{あが}崇め ^ほ讃めよ、^{かれ}彼を ^{うた}歌ひて ^{よよ}世世に ^ほ讃め ^あ揚げよ。

右 句 ^{てん}天の ^{もろもろ}諸の ^{とり}鳥、^{やじゅう}野獸と ^{いっさい}一切の ^{かちく}家畜と ^{しゅ}主を ^{あが}崇め ^ほ讃めよ、^{かれ}彼を ^{うた}歌ひて ^{よよ}世世に ^ほ讃め ^あ揚げよ。

(イルモス、「爐の中に歌頌せし少者を救ひて」)

天の 諸 の位鳥、野獸と一切の家畜と主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、

大仁慈に由りて罪犯者と偕に算へらるるを甘ぜし主よ、我の諸罪を抹し給へ、我が信を以て

萬世に爾を讃榮せん爲なり。

人の諸子は主を崇め讃めよ、イスライリ民は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、

主よ、爾の戈を以て我が諸罪の書券を裂きて、惡鬼の毒矢に傷つけられし我が心の病を

醫し給へ。

主の司祭等、主の諸僕は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、

我がハリストスよ、罪に昧まされたる我が心を爾の脅より流れし血にて洗ひ給へ、我が

萬世に爾を讃榮せん爲なり。

諸神[°]と諸聖人の 靈 と、諸義人と心の謙卑なる者と主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、

[生神女讃詞] 耕作せられずして、神聖なる力を以て萬有を養ふ天の穂を生ぜし童貞女よ、我が

飢うる卑微なる 靈 を飽かせ給へ。

(イルモス、「神たる力を以て燄の中に」)

アナニヤ、アザリヤ、ミサイルは主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、

十字架よ、慶べ、爾に由りて一瞬にて盜賊は神學士と顯れて呼べり、主よ、爾の國に於

て我を憶ひ給へと。我等をも彼の分に與る者と爲せ。

主の諸使徒、預言者、致命者は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、

ハリストスよ、爾は刺されて燄の劍を除きて、人人の爲に復樂園を開き給ふ。我等は其中

に入りて、常に爾の不死の生命を楽しむ。

我等主なる父と子と聖神^ほとを崇め讃めん。

〔聖三者讃詞〕 我等は父と偕に子及び聖神に、惟一の神性に於て伏拜して、塵の口を以て黙さず
して呼ぶ、至高きに光榮は三位一體の神に歸す。

今も何時も世々に、「アミン」

〔生神女讃詞〕 獨神の恩寵を蒙れる者よ、爾は童貞女にして子を生む、大なる秘密、畏るべ
き奇跡なり、蓋爾は身を取りし神、世界の救主を生み給へり。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

ハリストスの十字架、四極の恃頼よ、爾の導にて我等に穩に善き齋の海を渡るを得し
めて、諸罪の暴風より援けよ。

我等主を讃め、崇め、伏し拝みて世々に歌ひ讃めん、

イルモス 3調 「神たる力を以て焰の中にエウレイの少者に下りて現しし主を、司祭等よ、崇めて萬世に讃め揚げよ。」

第8歌頌



我等神を讃め崇め 伏し拝みて 世世にうたーい 讃めん。
かみたる ちからを 以て ほのおのうちに
エウレイの少者に降りて 顕れし主よ、司祭等よ あがめて、
萬世に 讃めー あげよ。

第8歌頌のイルモスの後

司祭 生神女光の母を讃歌を以て讃め揚げん。

（詠）〔ヘルビムの歌〕

第1句 我が心は主を崇め、我が^{たましい}靈は神我が救主を悦ぶ。

附唱 ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え、貞操を破らずして神言を生みし、
実の生神女たる爾を崇め讃む。



第2句 その婢の卑しきを^{かえり}顧み給へり、今より^{よろずよ}萬世我を福なりと言はん、→附唱ヘルビムより尊く

第3句 ^{ちから}権能を持ち給へるものは、我が為に大なる事を為せり、其の名は聖なり、其の憐れみは世世 彼
を畏るる者に臨まん →附唱ヘルビムより尊く

第4句 其の肘の力を表して、心の^{おご}驕れるものを散らし給へり、 →附唱ヘルビムより尊く

第5句 権ある者を位より斥け、卑しき者を上げ、飢うる者を善に飽かせ、富める者をむなしく帰らせ給
へり。 →附唱ヘルビムより尊く

第6句 其の僕、イズライリを^い納れて、我が先祖に告げしが如く、アウラアムと其の裔を世世に憐れむ事
を記憶し給へり、 →附唱ヘルビムより尊く

第九歌頌 聖ザハリヤの歌句、ルカ六十八至七十九節

右誦經句 ^{しゆくさん}祝讃 ^{かな}せらるる哉、主イズライリの神、^{かみ}蓋 ^{けだしそのたみ}其民を ^{かえり}眷みて、^{これ}之に ^{あがない}贖 ^なを爲し、

左誦經句 ^{われら}我等の爲に ^{ため}救 ^{すくい}の角を ^つ其僕 ^{そのぼく}ダウィドの家に ^{いえ}興 ^{おこ}せり、

右 句 ^{こせい}古世より ^{そのせい}其聖なる ^{よげんしゃ}預言者の ^{くち}口を ^{もつ}以て ^い言ひしが ^{ごと}如し、

左 句 ^{すなわちわれら}即 ^わ我等を ^{しよてきおよ}我が ^{およ}諸敵 ^{われら}及び ^{にく}凡そ ^{もの}我等を ^て惡む者の ^{すく}手より ^{すく}救ひ、

右 句 ^{もつ}以て ^{あわれみ}矜恤を ^わ我が先祖に ^{せんぞ}施 ^{ほどこ}し、^{そのせい}其聖なる ^{やく}約、^{すなわちわ}即 ^そ我が祖 ^{ちか}アウラアムに ^{ちかい}矢ひたる ^{ちかい}誓 ^をを

きねん
記念せん、

イルモス「生命を容れし常に流るる泉」

エリセイは 齋^{ものいみ} して死^しせし童子^{どうじ}を復活^{ふっかつ}せしめたり、録^{しる}されしが如^{ごと}し。我等^{われら}信者^{しんじや}も 齋^{ものいみ} して、
務^{つと}めて肉^{にく}の念^{おもい}を殺^{ころ}さん、彼處^{かしこ}に於^{おい}て生命^{いのち}を受けん爲^うなり。

謂^いふ、我等^{われら}に我が諸敵^{しよてき}の手より救^{おそれ}はれし後、懼^{おそれ}なく、彼の前に在^ありて、聖^{せい}を以^{もつ}て、義^ぎを以^{もつ}て、生涯^{しやうがい}彼^{かれ}に事^{こと}へしめんと。

哀^{かな}しい哉^{かな}、吾^わが 靈^{たましい} よ、審判^{しんぱん}は畏^{おそ}るべく、審判者^{しんぱんしや}の擬定^{ぎてい}は戦^{おの}く べし。務^{つと}めて痛悔^{つうかい}して、爾^{なんじ} の
爲^{ため}に十字架^{じゆうじか}に懸^かけられて、信者^{しんじや}を定罪^{ていざい}より救^{すく}ひ給^{たま}ひしハリストスと和睦^{わぼく}せよ。

子よ、爾も至上者^{とな}の預言者^{よげんしや}と称^{なづ}へられん、蓋主^{がいしゅ}の面前^{まへん}に行きて其の道^{みち}を備^{そな}へん、

十字架^{じゆうじか}に在^ありて盜賊^{とうぞく}の爲^{ため}に樂園^{らくえん}の欣^{よろこ}ばしき入門^{にゅうもん}を示^{しめ}ししハリストスよ、我^{われ}の爲^{ため}に痛悔^{つうかい}の門^{もん}
を啓^{ひら}きて、我^わが諸慾^{しよよく}の入門^{にゅうもん}を閉^とぢ給^{たま}へ、我^わが 爾^{なんじ} の仁慈^{じんじ}を讃^{さん}榮^{えい}せん爲^{ため}なり。

彼の民^{すなわち}に、其救^{ゆるし}は 即^{すなわち} 諸罪^{しよざい}の赦^{ゆるし}にして、我^{われ}が神^{かみ}の矜恤^{あわれみ}に因^よることを知らしめん。

〔生神女讃詞〕我^{われ}は惡^{あく}の深處^{ふかみ}に墜^{おと}されし者^{もの}として、罪惡^{ざいあく}の念^{おもい}に荒^あらされ、惡鬼^{あくき}に従^{したが}ひて、逸樂^{いつらく}の
奴隸^{どれい}と爲^なれり。 潔^{いさぎよ} き童貞女母^{どうていじよはは}よ、我^{われ}を助^{たす}けて、救^{すくい} の道^{みち}に向^{むか}はしめ給^{たま}へ。

イルモス「モイセイはシナイ山に於て」

此^{あわれみ}の矜恤^{あわれみ}に因^よりて、東旭^{あさひ}は上^{あさひ}より我等^{われら}に臨^みめり、

主^{しゅ}よ、爾^{なんじ} は仁慈^{じんじ}に由^よりて甘^{あま}じて己^{おのれ}を付^{わた}して、殺害者^{せつがいしや}に攜^{たづさ}へられ、審判座^{しんぱんざ}の前に立^まちて、爾^{なんじ}
が造^{つく}りし手^てにて批^うたれ、十字架^{じゆうじか}に釘^{てい}せられ、嘲^{あざけ}られ、戈^{ほこ}にて刺^さされ、身^みを以^{もつ}て 悉^{ことごと}く の 苦^{くるしみ}
を忍^{しの}び給^{たま}へり、我等^{われら}を救^{すく}はん爲^{ため}なり。

幽暗^{くらやみ}と死^しの蔭^{かげ}とに坐^まする者^{もの}を照^てし、我等^{われら}の足^{あし}を平安^{へいあん}の道^{みち}に向^{むか}はしめん爲^{ため}なり。

主^{しゅ}よ、爾^{なんじ} が十字架^{じゆうじか}に在^あるを見て、天使^{てんし}の會^{かい}は戦^{おの}き、光體^{こうたい}は光^{ひかり}を隠^{かく}し、地^ちは震^{ふる}ひ、萬有^{ばんゆう}は 爾^{なんじ}

に^お於ける^{きょうぼう}強暴に^よ由りて^{うご}動けり。神^{かみ}よ、爾^{なんじ}は己^{おのれ}の神聖^{しんせい}なる^{くるしみ}苦^{もつ}を以て我等^{われら}の救^{すくい}を成^なし給^{たま}へり。

光栄は父と子と聖神^{*}に帰す

【聖三者讃詞】至^{いた}りて神聖^{しんせい}なる三者^{さんしや}、性^{せい}に於て惟一^{おひ}にして分離^{ゆいいち}せざる者は、位^{ぶんり}に於て分れて、一^{もの}なる者は三^いと爲^{おい}り給^{わか}へり、是^{いつ}れ父^{もの}と子^{さん}と生活^なの神^{たま}、萬有^{これ}を護^{ちち}り給^こふ神^{せいかつ}なり。

今も何時も世々に、「アミン」

【生神女讃詞】子^こを生^うむ童貞^{どうてい}女^{じよ}、又^{また}夫^{おつと}に與^{あずか}らざる母^{はは}の事^{こと}を誰^{たれ}か聞^ききたる、マリヤ^{なんじ}よ、爾^{きせき}は奇跡^{なんじ}を行^{おこな}ひ給^{たま}ふ、然^{しか}れども是^これ如何^{いか}に、我^{われ}に言^いへ。我^わが産^{さん}の深^{ふか}きを窮^{きわ}むる勿^{なか}れ、是^この奥密^{おうみつ}は實^{じつ}に人^{ひと}の智慧^{ちえ}に超^こゆ。

我等の神よ、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す。

主^{しゅ}よ、我等^{われら}皆^{みな}爾^{なんじ}の傷^{きず}にて諸罪^{しよざい}の苦^{くるしみ}より醫^{いや}されたり、蓋^{けだし}爾^{なんじ}は十字架^{じゅうじか}に舉^あげられて、惡^{あく}の魁^{かしら}たる敵^{てき}に傷^{きず}つけ給^{たま}へり。祈^{いの}る、我等^{われら}に定罪^{ていざい}なく齋^{ものいみ}の時^{とき}を終^おへて、復活^{ふっかつ}に至^{いた}るを得^えしめ給^{たま}へ。

イルモス 3調 「モイセイはシナ山に於て棘の中に爾を焚かれずして神性の火を胎内に孕みし者として観、ダニイルは爾を截られざる山として観、イサイヤは芽を萌しし杖、ダヴィドの根より出でし者なりと呼べり。」

第9歌頌



＜戻る。[枠]のP15「常に福」へ＞

斎3 くづけ スティヒラ 【挿句の 讃頌】

樂園に於て禁ぜられし木の果を食ふに因りて世界に入りし死を爾の十字架を以て滅し
し主よ、祈る、爾親ら今の齋を以て我等を凡の靈を害する逸樂より援けて、永遠の
生命に存する糧の爲に勞するを得しめ給へ、我等が不朽の樂の榮冠、爾が眞の修齋者
の爲に備へし者を受けん爲なり。(本来は2回)

句) 主よ、夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡び樂しま
ん。爾我等を撲ちし日、我等が禍に遭ひし年に代へて、我等を樂しましめ給へ。願
はくは爾の工作は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其諸子に著れん。

(スティヒラ繰り返し略)

句) 願はくは主吾が神の恵は我等に在らん、願はくは我が手の工作进行を我等に助け給
へ、我が手の工作进行を助け給へ。

(致命者讃詞) 至りて讃美たる受難者よ、爾等は全地の爲に光體と現れて、ハリストスに呼
べり、主よ、光榮は爾に歸す。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン

【十字架生神女讃詞】

主よ、至りて無玷なる者は爾が甘じて木の上に釘せられしを見し時、泣きて爾の權柄を歌
へり。

＜→戻る。[枠] P19「至上者よ」へ＞

六時課

斎4 【預言のトロパリ】

てん お しじょうしゃ およそ い もの つく かみ われら すく たま わ きゅうせいしゅ われら なんじ たの
天に居る至上者、凡の生ける者を造りし神よ、我等を救ひ給へ、我が救世主よ我等爾を頼
めばなり。

◆ポロキメン

司祭 つつし き 謹みて聴くべし。

誦經 ポロキメン 提綱、(5調)

主よ、我爾に呼び、我が神に祈らん。(第29聖詠)

(句) 主よ、我爾を尊み崇めん、爾我を擧げたればなり。



司祭 えいち 睿智。

誦經 よげんしょ よみ イサイヤの預言書の讀第五章。

しゅ しんばん おい たか あ せい かみ ぎ おい そのせい あらわ とき
主サワオフは審判に於て高く擧げられ、聖なる神は義に於て其聖なることを顯さん。時

ひつじ おのれ い まか まきば あ がいじん と もの のこ よ た よ やしな
に羊は己の意に任せて牧場に在らん、外人は富める者の残したる嘉き田に依りて養は

わざわい かな かれら くうきよ なわ もつ おのれ ふほう ひ くるま ひきづな もつ ごと つみ
れん。禍なる哉彼等、空虚の索を以て己に不法を引き、車の綏を以てするが如く罪

ひ もの かれら い かれ いそ すみやか そのこと な われら み ため
を引く者、彼等言ひて、彼は急ぎて速に其事を爲すべし、我等の見ん爲なり、イズラ

せいじゃ むね ちか おこな われら し ため い もの わざわい かな かれら
イリの聖者の旨は近づきて行はるべし、我等の知らん爲なりと云ふ者や。禍なる哉彼等、

あく よ ぜん な ぜん よ あく な やみ もつ ひかり な ひかり もつ やみ な ながき
悪を呼びて善と爲し、善を呼びて悪と爲し、暗を以て光と爲し、光を以て暗と爲し、苦

もつ あまし な あまき もつ にがし な もの わざわい かな かれら おのれ み ちえ な
を以て甘と爲し、甘を以て苦と爲す者や。禍なる哉彼等、己を視て智慧ありと爲し、

みづか かえり ちしき な もの わざわい かな かれら さけ の いさ よい いた のみもの
自ら顧みて知識ありと爲す者や。禍なる哉彼等、酒を飲むに勇ましく、酔を致す飲料

ちょうわ つよ もの かれら まいまい よ つみ もの ぎ な ぎ もの そのぎ うば
を調和するに強き者、彼等、賄賂に因りて罪ある者を義と爲し、義なる者より其義を奪ふ

もの これ よ ひ わら くら ほのお かれくさ ほろぼ ごと か か ごと かれら ね く
者や。此に縁りて火の藁を食ひ、焰の枯草を滅すが如く是く、是くの如く彼等の根は朽

ち、彼等^{かれら}の花^{はな}は塵^{ちり}の如^{ごと}く散^ちらされん、蓋^{けだし} 彼等^{かれら}主^{しゅ}サワオフの律法^{りつぽう}を棄^すて、イズライリの聖者^{せいじゃ}
 の言^{ことば}を藐^{からん}ぜり。此^{これ}に縁^よりて主^{しゅ}の怒^{いかり}は其民^{そのたみ}に燃^もえ、彼^{かれ}は其手^{そのて}を伸^のべて彼等^{かれら}を撃^うたん、諸山^{しよざん}
 の震^{ふる}ひ動^{うご}き、彼等^{かれら}の屍^{しかばね}の糞土^{ふんど}の如^{ごと}く衢^{ちまた}に在^あるに迫^{およ}ばん。然^{しか}りと雖^{いえども} 其怒^{そのいかり}は息^やまず、其
 手^ては尚^{なお}伸べられん。

＜→ 梓へ戻る P36＞

晩 課

齋 5 【主よ、爾によぶと讃頌】1 調

スティーヒラ

A B

主や 汝によぶすみやかに我れにいたりたまえ 主や

A

われに聞きたま え 主や 汝に呼ぶすみやかに我れに

B

いたりたま え 汝に呼ぶときわが祈りの声をいれたま え

A

主や われに聞きたま え ねがわくはわがいのりは

B

香炉^{かうろ}のかおりのごとく 汝が"かんは"せのまえにのほり

C

わが手をあぐるはくれの祭のごとく いれられん 主や

われにききたま え

誦經　しゅ　わ　くち　まもり　お　わ　くちびる　もん　ふせ　たま　わ　こころ　よこしま
主よ、我が口に 衛 を置き、我が 唇 の門を扨ぎ給へ、我が 心 に 邪 なる

ことば　かたぶ　ふほう　おこな　ひと　とも　つみ　いいわけ　なか
言 に 傾 きて、不法を 行 ふ人と共に罪の 推諉 せしむる 母れ。

わ　こえ　もつ　しゅ　よ　わ　こえ　もつ　しゅ　いの　わ　いのり　そのまえ　そそ　わ　うれしい
我が聲を以て主に籲び、我が聲を以て主に祷り、我が 祷 を其前に注ぎ、我が 憂 を

そのまえ　あらわ　わ　たましいわれ　うち　よわ　とき　なんじ　われ　みち　し　わ　ゆ　みち
其前に 顯 せり。我が 靈 我の衷に弱りし時、 爾 は我の途を知れり、我が行く路

おい　かれら　ひそか　わ　ため　あみ　もう　われみぎ　め　そそ　ひとり　われ　みと
に於て、彼等は 竊 に我が爲に網を設けたり。我 右 に目を注ぐに、一人も我を認むる

もの　われ　のが　ところ　わ　たましい　かえりみ　もの　しゅ　われなんじ　よ　い
者なし、我に遁るる 所 なく、我が 靈 を 顧 る者なし。主よ、我 爾 に呼びて云へ

なんじ　われ　かくれが　い　もの　ち　おい　われ　ぶん　わ　よ　き　たま　われ
り、 爾 は我の 避所 なり、生ける者の地に於て我の分なり。我が籲ぶを聴き給へ、我

はなはだよわ　われ　はくがい　もの　すく　たま　かれら　われ　つよ
甚 弱 りたればなり、我を 迫害 する者より 救ひ 給へ、彼等は我より強ければなり。

<中略>

(句) 我が靈を^{ひとや}獄より引出して、我に爾の名を讃榮せしめ給へ、
自調の讃頌、第一調

けいてい　ぞくしん　ものいみ　まも　した　もつ　いつわり　い　なか　けいてい　ため　いざない　つまづき　お　なか
兄弟よ、屬神の 齋 を守りて、舌を以て 謊 を言ふ勿れ、兄弟の爲に誘惑の 蹟 を置く勿れ、

すなわちつうかい　なみだ　もつ　たましい　ともしび　あきらか　よ　われら　われ　ざいか
即 痛悔の涙を以て 靈 の 燈 を 明 にして、ハリストスに呼ばん、我等に我が罪過を

ゆる　たま　なんじ　ひと　いつく　しゅ
赦し給へ、 爾 は人を 慈 しむ主なればなり。

(句) 爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。

(致命者讃詞) 至りて讃美たる致命者よ、地は爾等を隠さず、天は爾等を受けたり、の門

なんじら　ため　ひら　なんじら　そのうち　い　せいめい　き　もつ　なぐさ　われら　たましい　へいあん
は爾等の爲に啓かれ、爾等は其内に入りて、生命の樹を以て慰む。我等の 靈 に平安と

おおい　あわれみ　たま　いの　たま
大なる 憐 とを賜はんことをハリストスに祈り給へ。

(句) 主よ、我深き處より爾に籲ぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。

又讃頌、イオシフ師の作、第三調。

しぜん　じれん　しゅ　しんせい　しと　きとう　よ　われら　しょうかん　じょう　もつ　よ
至善にして慈憐なる主よ、神聖なる使徒の祈禱に因りて、我等に 傷感 の 情 を以て善く

ものいみ　とき　おく　え　たま　われら　みなすく　なんじ　さんえい　ため
齋 の時を送るを得しめ給へ、我等皆救はれて 爾 を讃榮せん爲なり。

(句) 願くは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

主よ、爾の降臨は大にして畏るべし、其時爾は坐して義なる審判を行はん、願はくは
我定罪に當る者は定罪せられざらん。求む、神として、爾の使徒の嘉く納れらるる祈禱
に因りて、我を憐み給へ。

(句) 主よ、爾若し不法を糾さば、主よ孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾
の前に敬しまん爲なり。

又讃頌、フェオドル師の作、第六調。

ハリストスの使徒、地上の者の燈、世界の爲に我が神の至上なる智識の寶藏なる者よ、爾等
を歌ふ者を聖なる祈禱を以て誘惑より救ひて、我等に齋の時に於て生命を平安に送るを得
しめ給へ、我等が宜しきに合ひてハリストスの苦の時に至りて、勇ましく我が神に歌を
奉らん爲なり。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

別冊2

その週の調の生神女讃詞

八調經 別冊参照

＜→戻る、 梓 P60 「聖にして福たる」＞

齋 6 【ポロキメン】と旧約聖書の読み

輔祭 謹みて聴くべし

司祭 衆人に平安

輔祭 睿智、謹みて聴くべし

義人よ、主の爲に喜び樂しめよ。。句、不法を赦されたる人は福なり。(第31聖詠、4調)

¹ 大齋第1週奉事式ではすべて1調で代用している。本来はその週、その曜日の生神女讃詞。または月課經のその日の生神女讃詞。



司祭、^{えいち}睿智。

誦経、^{そうせいき}創世記^{よみ}の讀。

司祭、^{つつし}謹^きみて聽くべし。

誦経、【創世記 4 章】

カインは神の^{かみ}面^{おもて}の前^{まえ}より出^いでて、エデムの^{ひがし}東^ちなるナイドの地^ちに居^おりたり。カインは其妻^{そのつま}
 を知^しれり、彼^{かれ}孕^{はら}みてエノフを生^うめり。カイン^{まち}邑^たを建^{そのまち}て、其^{その}邑^こを其子^なの名^よに因^よりてエノフ
 と名^なづけたり。エノフにガイダド^{うま}生^うれたり、ガイダドはマレレイルを生^うみ、マレレイル
 はマフサルを生^うみ、マフサルはラメフ^{ふたり}を生^うめり。ラメフは二人^{つま}の妻^{めと}を娶^{ひと}れり、一^なの名^なは
 アダと^い曰^{ひとり}ひ、一^なの名^なはセツラと^い曰^ふ。アダはイヲワイルを生^うめり、彼^{かれ}は幕^{まく}に居^おる牧畜者^{ぼくちくしゃ}
 の祖^{ちち}と^な爲^なれり。其^{その}弟^{おとうと}の名^なはイウワルと^い曰^ふ、彼^{かれ}は琴^{こと}と笛^{ふえ}とを^{はつめい}發^{もの}明^せせし者^{なり}。セツラ
 はフォワエルを生^うめり、彼^{かれ}は鍛冶^{かねうち}にして、銅^{あかがね}と鐵^{てつ}とを^{きた}鍛^{もの}ふ者^{なり}。フォワエルの^{いもうと}妹^は
 ノエマなり、ラメフは其^{その}二^{ふたり}の妻^{つま}に^い謂^おへり、アダ^お及^よびセツラよ、我^わが^{こえ}聲^きを^き聽^きけ、ラメフの
 妻^{つま}よ、我^わが^{ことば}言^いを^い容^{われ}れよ、我^{われ}我^わが^{きず}瘡^{ため}の^{ひと}爲^{ひと}に^{ころ}人^{ころ}を^わ殺^{いた}し、我^わが^{いた}傷^みの^{ため}爲^{しょう}に^{ころ}少^{ころ}者^もを^{ころ}殺^{ころ}せり、若^もしカ
 インの^{ため}爲^{しちばい}に^{ばつ}七^た倍^めの^{しちじゅうしちばい}罰^{ばつ}あ^らば、ラメフの^{またそのつま}爲^はには^{またそのつま}七^{またそのつま}十^{またそのつま}七^{またそのつま}倍^{またそのつま}の^{またそのつま}罰^{またそのつま}あ^らん。アダ^{またそのつま}ム復^{またそのつま}其^{またそのつま}妻^{またそのつま}エワを
 知^しれり、彼^{かれ}孕^{はら}みて子^こを生^うみ、其^{その}名^なをシフと^な名^なづけたり、曰^{いわ}く、神^{かみ}は我^{われ}に他^たの子^こを^{おこ}起^{おこ}して、
 カインの^{ころ}殺^{ころ}ししアワエリに^か代^かへたり。シフにも子^こ生^うれ、彼^{かれ}其^{その}名^なをエノスと^な名^なづけたり、
 此^この時^{とき}人^{ひと}始^{はじ}めて主^{しゅ}神^{かみ}の名^なを^よ籲^よべり。

輔祭 ^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし。

誦經 ^{ボロキメン} 提綱、(32 聖詠、第 1 調)

主よ、我等爾を頼むが如く、爾の憐を我等に垂れ給へ。

句) 義人よ、主の爲に喜べ、讃榮するは義者に適ふ。



輔祭 ^{めい} 命ぜよ。

兩手に香炉と火つけた燭台を取り、宝座の前に立ち、東に向かって十字を描いて、

司祭 ^{えいち} 睿智、^{つつし} 肅 ^た みて立て。

(それから西に向き直って、会衆に向かって)

司祭 ^{ひかり} ハリストスの 光 ^{しゅうじん} は 衆人 ^{てら} を照す。 (このとき会衆は伏拝する。) ²

司祭、^{えいち} 睿智。

誦經、^{しんげん} 箴言 ^{よみ} の 讀。 第五、六章。(5:15-6:3)

子よ、^{なんじ} 爾 ^{おのれ} 己 ^{いけ} の池より、^{おのれ} 己 ^{いづみ} の泉より流るる水を飲め。^{なんじ} 爾 ^{いづみ} の泉は外に溢れ、^{ほか} 河 ^{あふ} の水は ^{かわ} 衛 ^{みず} ^{ちまた}

に流るべからず、^{なんじ} 是 ^こ れ ^{ひとり} 獨 ^{なんじ} 爾 ^き に歸すべし、^{なんじ} 爾 ^{とも} と偕に他人に歸すべからず。^{なんじ} 爾 ^{いづみ} の泉は祝福 ^{しゅくふく}

せらるべし、^{なんじ} 爾 ^{わか} の少き時の妻を楽しみて、^{とき} 彼 ^{つま} を愛すべき ^{たの} 塵、^{かれ} 悦 ^{あい} ぶべき鹿の如くせよ、^{めじか} 其 ^{よろこ} ^{しか} ^{ごと} ^{その}

乳房を以て常に足れりとし、^ち 其 ^{ふさ} 愛を以て常に ^{もつ} 喜 ^{つね} べ。我が子よ、^わ 爾 ^こ 何ぞ淫婦を戀ひ、^{なんじ} 他 ^{いんぶ} の ^{した} ^た

婦 ^{おんな} の胃を懷かん。^{むね} 蓋 ^{いだ} 人の途は主の目の前に在り、^{けだし} 彼 ^{ひと} は其凡そ行く ^{みち} 所 ^{しゅ} を測る。^め 惡 ^{まえ} 者は ^あ 己 ^{かれ} ^{その} ^{およ} ^ゆ ^{ところ} ^{はか} ^{あく} ^{しや} ^{おのれ}

の不法に執へられ、^{ふほう} 其 ^{とら} 罪の繩に繋がる、^{その} 彼 ^{つみ} は訓誨なくして死し、^{なわ} 其 ^{つな} 無知の多きに因りて亡 ^{かれ} ^{おし} ^え ^し ^{その} ^{むち} ^{おお} ^よ ^{ほろ}

ぶ。^わ 我が子よ、^こ 爾 ^{なんじ} 若し友の爲に保證を爲し、^{なんじ} 他 ^{とも} 人の爲に ^{ため} 爾 ^{うけ} の手 ^{あい} を授けしならば、^な 己 ^{たにん} ^{ため} ^{なんじ} ^て ^{さず} ^{なんじ} ^{おのれ}

の口 ^{くち} の言 ^{ことば} に因りて羈に繋り ^よ 己 ^{とら} の口 ^{くち} の言 ^{ことば} に因りて執へられしなり。^わ 我が子よ、^こ 我が ^わ 爾 ^{なんじ} に

いまし ^{ところ} 戒 ^{おこな} むる ^{みづか} 所 ^{すく} を行ひて自ら救へ。 (次に先備聖體禮儀を行ふ)

² エルサレムの聖墳墓教会の受難週に灯りを取る儀式から始まったと言われる。